

今月の花

軽井沢の山に咲くハクウンボク

細江久美子（撮影・文）



軽井沢の山に咲く白い初夏の花。白い雲の花の名の通り、ぽっかり白い雲が浮かんだように咲きます。軽井沢には【ハクウンボク通り】と名前がついた別荘地もあり、軽井沢の花として親しまれていることがわかります。

軽井沢に住み始めて40年近くですが、こんな静かなGWは初めてでした。

今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

スペイン市民戦争で死んだガルシア・ロルカが目にした風景が見たくて、グラナダを訪れたのは1976年春だった。その時、街の本屋で手に入れたのは『ロルカ詩集』とヒメネス『プラテロと私』。

二人ともアンダルシアをこよなく愛したが、表現の方向はまったく異なっていた。ロルカの詩には自身の運命を予感させる死が遍在する。ヒメネスの散文詩には命を育む自然の美と癒しが唄われている。

綿毛のロバのプラテロと子どもの私の友情の物語。だが、これは、黄金の刻は二度と戻らないという哀歌^{エレジー}なのだ。

※[ファン・ラモン・ヒメネス](#)（1881-1958）モゲール生まれのスペインの詩人。1956年にノーベル文学賞を受賞。

ファン・ラモン・ヒメネス

散歩（部分）

夏の盛り、若々しいスイカズラが垂れ下がっている路を、嬉しい気持ちに満たされて路に行くプラテロと私。私は本を読んだり歌を唄ったり、空に向かって詩をつぶやいたりする。

プラテロは、道端の牧場の柵の影になったところの草や埃にまみれて咲いているゼニアオイの花や黄色いビナーグレ・ドレッシングにつかうハーブをもぐもぐと食む。

ともあれ、私たちの路行きは、ほどよいほどに短くてまるで色々ある人生の、ふとしたなかのとても気安くて気持ちがいい一日のよう。

お城（部分）

ほら、夕陽が沈んでいく。大きくて緋色で、目に見える神さまみたい。あらゆる恍惚と共に現れそしてウエルバの先にある海の水平線の向うに去っていく圧倒的な静寂の時、この世の至福。

この世っていうのはつまり、モゲールとその自然、そしてお前と私のことだよ、プラテロ。

『プラテロと私（抄） アンダルシア哀歌』（ヒメネス著 谷口江里也訳）未知谷刊より

ある4年生の学級支援の7か月

川崎佳子（元小学校教諭・こども支援士）

○ プロローグ

小学校担任・教育相談所勤務後、2016年4月に東京都教育委員会の東京学校支援機構のサポーターバンクに登録しました。バンクでは「あなたの支援を必要とする学校を紹介します」とのキャッチフレーズと共に支援の内容（部活動、教職員の事務、学習・特別支援教育、心理・福祉支援、日本語、ITC、その他専門的な知識・技能を活かした支援）が記されていました。そこで、担任経験を活かせる「学習支援」と特別支援教育士資格を活かせる「その他専門的な知識・技能」の分野で登録しました。

9月に、A小学校から4年生のクラスの担任支援と児童支援をしてほしいと連絡がありました。学校から「新しい担任になって年度4月当初は落ち着いていたが、担任の指導が子どもたちに行き届かない。学年が終わるまで、支援に入ってほしい」との話がありました。それまでは、先生たちが空き時間に代わる代わる教室に入り担任をサポートしているとのことでした。担任は20代後半のやさしそうな男の先生で、新卒から特別支援学級で少人数の指導をしていたとのこと。話をお聞きすると、「はじめは言うことを聞いていた子どもたちが、だんだん言うことを聞かず勝手なことをし始めた。自分の指示を無視する子もいて授業が成立しない」とのことでした。

そこで子どもたちに会う前に、廊下で授業や休み時間など子どもたちの様子を観察しました。教室はざわざわし、絶えず何か音が聞こえ、授業に集中できていません。担任が授業を進めることに困難な様子が理解できました。

○ 自己紹介の工夫

私がこの学級の担任支援と児童支援に入ったのは、週1日、9月から3月までの約7か月でした。この期間に担任とはむろん、子どもたちとの人間関係を作ることが大事だと考えました。子どもたちとの出会いで自分を知ってもらおう。どのような自己紹介をしたらよいか、真剣に考えました。ありきたりの自己紹介では聞いてくれないでしょう。

子どもたちと同じ年令の時の私の様子を話すことにしました。けんかした後に、「相手の靴を隠した」話をしました。木造校舎の床下は薄暗く、蛇やカエルのすみかで誰にも見つからない場所だと思い、右の靴を投げそしてもう一つを投げようとした時、担任に見つかってしまいました。「いばりんぼ」と言われていた私はいい子ではなく、悪い子だったと話しました。叱られたのはもちろんですが、靴隠しを知った時の母の悲しそうな様子も話しました。

いつもは、絶えずよけいな音を立てている子、叫び声をあげている子、ノートでバンバンと机をたたいている子が、私の自己紹介の話に耳を傾けてくれました。そして、その中の一人が「長い話だな」と反応してくれたのです。

これまで、多くの先生たちが、このクラスの子どもたちにかかわりました。子どもたちは、怒られること、注意を受けることが日常でした。新しい大人が、「また注意するために来たか!」「このクラスは変わらない!」という、あきらめと不信感があつたと思います。

私はこの子たちが「私に興味を持ってくれた」「私に期待している」ことを素直に感じることができました。

教室に入った日から、身近なことに目を向けて声かけしようと心がけました。担任から聞いていた一番手ごわいB君が、算数の時間、筆算をするのに、短い定規を使い、線をきれいに引いているのを見ました。「すごいね。計算が見やすい。間違いもわかりやすい」とほめました。B君のように定規を使っている子どもたちは何人かおり、B君をほめ、その子どもたちもほめました。

○ クラスの子どもたち

学級に入ってすぐ、校内見回りの最中に、手足をひもでしばられた男の子が、人影のいない校内の隅に転がされているのを見ました。それを取り巻く数人の子とB君の姿を見ました。

「何してるの?」「かんきんごっこだよ」

「先生は知ってるの?」「知らないよ」

「自分がしばられてころがされたらどんな気持ち?」

子どもたちは「遊び、遊び」と平然と答えました。

担任に報告すると、B君には取り巻きがいることは認識していたものの、そのような行為をしていたことに本当に驚いていました。

数日して、今度は担任が現場を目撃しました。そこから職員会議、保護者面談、クラス指導、個人指導へとつながっていきました。

B君は自分の行為が話題になって学校が動いたことで、「先生、教えて」などとそれ迄、私に向けていた親和的な態度を一変させ、攻撃的な態度が強くなりました。

仲間から怖がられていたB君ですが、凶工の時間、クラスのみんなから頼りにされるような行動をしていました。道具（電動糸鋸、のこぎり）の扱いが上手なB君に何人かが「教えて」と近寄っていくのが見えました。女子も男子もいました。女子は「教えてっていうと教えてくれるよ。うまいんだよ」と私に言いました。すかさず「みんなが不得意な道具をあなたはうまく使うね。どこで習ったの?」「家で」「誰に?」「お父さん」と。

B君との会話の機会を見つけて関わりました。

また、学習中は挙手が多く、勉強ができると一目置かれているAさんがいました。他の子どもたちは自分の意見があっても、彼女の言うことに「いや」と言えないのです。例えば、発表原稿を作成するためのビデオ収録の折に、時間の制約があり、一人が1回と制限されているのに、Aさんが「もう一回やらせて」と要求すると、グループの皆が「いいよ」と従うのです。クラスでは、周りに止める者がおらず、強い子の要求はいつも通っていく場面が多くみられました。

集団を形成し行動する喜びを学ぶ時期の子どもたちが、そのエネルギーを使う方向を見失い、力をもて余しているのではないか。何とかよい方向にエネルギーを向けようと担任と知恵を絞っていきました。

○ほめること、励ますこと

そこで、まず始めたのは子どもたちに真正面から向き合うことでした。

担任の先生と何度も話し合い、次の3点を共通理解しました。

- ①子どもの長所を具体的に見つけよう。
- ②よいことは、クラスで共有の宝物にしよう。
- ③よいところをほめ、励ましていこう。

担任の先生は、首から下げたメモ帳に、日々の子どもの活躍や、子どもたちからの申告による良いこと、頑張っていることなどの内容を即座にメモされました。

私が見つけた「今日の良いこと・私自身が感動したこと」は、子どもたちがお昼を食べる給食の時間に伝えることにしました。子どもたちに伝えたいことは沢山ありました。学習時、休み時間、当番活動、掲示物の作品で見た、個人や集団での努力の跡や心が温かくなる行動です。子どもたちが嫌がる掃除道具の後始末、雑巾絞りや給食時の跡片付けの様子など陰でクラスを支えている行動には光を当て、ほめていきました。B君が仲間から頼りにされ道具の扱いを教えている行為などは、そうした時間に皆に伝え「クラスの宝の行為だね」というと本当に嬉しそうでした。

11月半ば頃になると、守ることや禁止事項の張り紙が多かった教室掲示に変化が見られるよう

になりました。クラスで協力してできたこと、友だち・仲間のいいところなどが、可愛いカードに丁寧な字で書かれて張り出されました。

子どもたちの成長はいろいろな場面で出てきました。

体育の飛び箱の授業のときのことで。

グループごとに道具の用意をして、飛び箱の演技をします。一人が飛ぶと励ましの声が飛びかい「がんばれ！」との拍手がわきます。また、「こうしたほうがいいよ」との声掛けがあり、チャレンジします。担任のアドバイスも子どもたちは素直に受け止めるようになりました。

わがままだったAさんも一度も飛べなかった飛び箱に挑戦しました。「手を前についてごらん」とのアドバイスにもすなおに従い、飛べるようになりました。

いつも落ち着かず、何かと文句の多いC君がその動物になり切って書いた詩です。

首がじゃま（きりん）

私はいつも 首がじゃまだと思った
ねる時も水をのむ時も 首がじゃまだと思った
だけど はじめて森をぬけた時 首が長いといいと思った
それはいいけしきだった

ほかのどうぶつにも見せたいな

「他の立場から物事を考え見ることができる」Cくんのまなざしを垣間見ることができて、心が熱くなりました。

遠慮がちで、自信がないように行動していたS君の手紙です。

「一学期よりも勉強ができるようになった気がします。むずかしい問題を教えてくれたり、いつも会うと温かい声をかけてくれました。先生がいなかったら、何もかも一学期と変わらなかったと思います。これからは、クラスのみんなをまとめたいです」

告げ口や訴えが多かった担任への子どもたちの声が、この頃から、「よいこと、頑張ったこと、嬉しかったこと」の報告になってきました。

子どもたちの成長と共に、担任の先生も余裕が出てきて、笑顔が多くなりました。

○子どもたちの成長、そして担任からの手紙

私は、その感動を伝えたくて、冬休みを前にクラスの子どもたちに宛てて、「あなたがたの成長は素晴らしい。私の心は感動でいっぱいです」と手紙を書きました。すると子どもたち一人ひとりから返信が返ってきました。

その一つ「監禁ごっこ」をしていた中心人物のB君からは、「いつもやさしくしてくれてありがとう。ぼくは今がんばっていることは、やさしくすることです。でもなかなかできないから、アドバイスを下さい。いつもありがとうございます」と書いてありました。

B君は、けなげに自分の欠点を克服しようと努力しました。その後、6年生の運動会に向けて、児童会会長を陰で支え、仲間や先生方の信頼を集める活躍を見せました。

担任が語ってくれた苦しみは、私もかつて担任として経験してきたことでした。

「憧れていた通常学級の担任でした。私が若いからでしょうか。最初、子どもたちはほんとに喜んで迎えてくれました。でも学習内容も特別支援学級担任とは違い、量も多く、その教材研究に多くを費やす時間に追われました。どう教えるかに目が行って、子どもたち一人一人が見えなくなりました。30人近く子ども達一人ひとりが様々な要求を始め、どう応えていくか、子どもたちとのか

かわりが上手くできなくなりました」と。

学年の他の先生方も、そんな担任を教材研究などを始め一生懸命支えていました。私は一日の終わりには、必ず担任に手紙を残しました。担任が気が付いていないと思われる子どもの成長や努力などを伝えることを心がけました。授業の中で工夫があったところや、こうしたら分かりやすくなるだろうという教え方なども書きました。

子どもたちからの手紙と共に、担任の先生から子どもとかかわるよろこびの感想が綴られていました。本当に嬉しいものでした。

「毎日あたたかい気持ちでご指導頂きありがとうございます。初めての学級担任として四苦八苦し、非常に苦しい時期もありましたが、毎日この子どもたちと会うのが楽しみで仕方なく、愛しくて仕方ありません。日々わずかながら着実に成長していく子ども達の姿を見て、私は幸せ者だと思います。“一人ひとりに輝く宝物がある”という信念をもち、これからも日々修行していきます」

実践報告 II

注)「子どものこころQ&A」は、本来子どもや大人からの問いに答えるコーナーですが、そうしたつぶやきをする子どもへの理解と対応のために、あえて会員向けのAをご執筆いただきました。

上手に読めるまでの長い道のり

—学習支援の現場から

清 文枝 (テレビ朝日アスク講師・こども支援士)

○ プロローグ

「Q&A」委員会から、下記のようなQへの執筆を依頼されました。

○ 上手に読めるようになりたいです (中1女子)

Q: 国語の授業で音読があるけど、私はつかかかってうまく読めません。つかかかるとあせっちゃうし、読むのがイヤになります。どうしたらいいですか。(るみ)

この問いに、これまで私が小学校で学習支援をしてきた複数の子どもの顔が浮かんできました。

15年ほど前から近くの小学校で「一斉授業だけでは、少し遅れ気味になってしまう子どもたち」のサポートを続けてきました。その遅れは、生活面であったり学業面であったり、あるいは友だち同士のコミュニケーションであったり、様々です。そうした中に、るみちゃんのように、「うまく読めない」子どもが何人もいました。

こうした子どもをサポートしようとする時には、まず、その子がどんな部分でつまづいているのかをしっかりと観察して、これまでの私の経験の中から、効果のありそうな方法を種々試して様子を見ていきます。「うまく読めない」という単純なつまづきの中にも、実は様々なタイプがあるからです。

○ 文字の形がつかめない

1年生のA君は、ひらがなが読めなくて書けませんでした。自分の名前は書けるのですが、そこに使われている文字が、別の場面で出てくると読めないのです。連絡帳に毎日書く「こくご」の3文字でさえ、なかなか覚えることが出来ませんでした。

よく見ていると、一文字のまとまりが、どこまでなのかが分かり難いようでした。例えば、「こ」という字が、1画目の上の棒と2画目の下の棒、それぞれが別の文字としてバラバラに見えているような感じです。この原稿は横書きなので、横書きの場合、「かに」という言葉があったとします。これが彼には「カ | こ」のように見えているのかもしれない。そう気が付いてからは、彼が文字を読んだり書いたりする時に、国語の教科書に載っている「あいうえお表」で、文字を一つずつ指さして見せるようにしました。この「あいうえお表」は一文字一文字が色違いの○や□で囲まれていたので、一文字の形がつかみやすかったのです。指さすときには、必ず「音」にもしました。

「文字」と「音」とを結び付けたかったから、耳元でその文字を私が音にし、彼が文字をよく見ながら書き写す。そんな作業を、連絡帳を書く度に毎日繰り返してきました。

夏休みが明けてしばらくすると、「こ」「く」「ご」や「さ」「ん」「す」「う」は自分で声を出しながら書くようになってきました。一文字ずつの形がだいたい頭に入ったようなので「あいうえお表」はいざという時にだけ使うことにして、私の立ち位置も彼の横から、黒板横にかえました。手が止まりかけたら、板書の文字を指さして、「今どの文字を書いているのか」を見えやすくするためです。秋の終わり頃には、こうした援助もほとんどいなくなり、本人が一文字一文字、声を出しながら書くようになってきました。自分で「音」と「文字」をつなげる作業ができるようになったのです。そして冬休みが終わる頃には、耳元で「まるいち こくご」と読んであげると、黒板の文字を見ないでも①こくごと書けるようになりました。頭の中に文字が定着してきたのです。

○ 言葉の切れ目がわからない

この男の子ほどでなくても、小学校1,2年生で、すらすらと音読ができない子どもは毎年必ずいます。原因としては、主に以下の3つがあるように思います。

① 語彙が不足していて単語の切れ目がわからない。

「にほんごはえいごのようにもじともじとのあいだにすきまがありません」

わざとひらがなで書きましたが、読みにくいですよ。 「ひらがな」ばかりが続く文章は実は読み取りにくいのです。それでも読めるのは、文字の羅列の中から単語を見つけ区切ることができるから。語彙が不足していると区切りがどこなのかがわかりません。

② 拗音や促音、長音など特殊音節のルールがつかめない。

日本語の基本は一文字一音ですが、一部に特別なルールが発生します。

「きゃ・きゅ・きょ」や「ちょっと」など小さな文字が入った時、助詞の「は」「を」「へ」、また「おねえさん」など伸ばす音を読む時のルールです。この特別ルールが呑み込めないとスムーズな音読ができなくなり「読むのが苦手」を育ててしまいます。

③ 文字を目でしっかり追えないために行がずれる。読み飛ばしをする。

目の動きもスムーズな読みには大きく関係します。最近目は目のトレーニングをする教材も出ていますが、まずは読んでいるところを指でたどるといった方法でだいぶ改善できるように思います。

こうした「読み」の課題に対して、私のいた小学校ではMIM(多層指導モデル)というものを利用しています。国立特別支援教育総合研究所の方が開発した指導の考え方で、早期の読み能力、特に

特殊音節を含む語の、正確で素速い読みに焦点を当てて指導できる教材が用意されています。

例えば①に関しては、「いかさかなたこかい」（実物は縦書きです）と書かれたものに線を入れ「いか | さかな | たこ | かい」というふうに単語で区切る練習をします。色々な問題でこれを繰り返すことで、「一文字ずつぶつぶつ区切って読む」から「単語ごとに読む」感覚が育ちます。語彙を増やしていくための絵カードも用意されていますので、合わせて使っていくことで単語の切れ目を掴む力が伸びていくのです。

②の特殊音節のルール。例えば促音の「っ」は「つまる音」という風に言われますが、「つまる」はイメージがしにくいです。「ねこ」と「ねっこ」はどこが違うのか。「ねこ」は2拍、「ねっこ」は3拍で、ちいさな「っ」の時は黙っている。私の場合、これをリズムを取りながら練習します。特殊音節は苦手なまま進んでしまうお子さんが多いので、MIMの教材も利用しながら繰り返し刷り込んでいくことを大切にしてきました。

※MIM(多層指導モデル)：国立特別支援教育総合研究所

ホームページ URL：<http://forum.nise.go.jp/mim/>

○ 実は言葉を知らない

直近の5年間は、主に3, 4年生を個別に指導してきましたが、中学年になっても特殊音節で躓いていたり、一文字ずつぶつぶつ切れるような読み方をしたりする子どもは、学業全般に弱さを抱えていることが多いようです。こうした子どもは、物語文より説明文の読み取りが苦手という傾向が見られますので、説明文によく使われる「接続詞」など、抽象的な言語の意味や使い方を、繰り返し丁寧に教えるようにしています。

また算数などの成績に比べて、国語の弱さが目立つ子どもは、説明文よりもむしろ物語文の音読を苦手に行っていることが多いようです。難しい説明文はすらすら読むのに、ほのぼのした昔ばなしや冒険談では、あちこちで読みが止まってしまう。実は、ご両親のどちらかが外国籍の場合に、こうしたことが起こりやすいようです。言葉の意味や背景がわからないため、どこで区切ったらいいのか、どんなアクセント・イントネーションになるのかがわからなくなっているのですね。

こうした子どもの場合は、とにかく読んでもらって、少しでも切り方がおかしかったり、アクセントがあいまいになっていたりする言葉を全て拾って、絵図や写真、身振りなどを用いて説明します。「知っていて当たり前」と大人が考えてしまうところが意外な落とし穴で、例えば擬態語や擬声語などでつまづいていることが、結構あるのです。「とぼとぼ」帰るのか、「ぴよんぴよん」帰るのか。雨が「しとしと」降るのか、「ざあざあ」降るのか。こうした描写が主人公の心情をあらわしていることも多い物語文で違いが判らないと、読み取りにはかなり支障が出てしまいます。

○ 上手に読めるまでの長い道のり

文字を覚えたての子どもが、一文字ずつたどたどしく読んだり、「きゃ、きゅ、きょ」や「ちよつと」といった小さな文字の入った言葉を誤読したりということは、よくあることですし、殆どの子どもは、経験を積んでいくうちにスムーズに読むことができるようになります。しかし一部の子どもたちは、経験を積んでも、なかなか力が伸びなかったり、家庭環境などから経験を十分に積むことができなかつたりで、音読に苦戦します。

そうした子どもたちにとっては、「上手に読めるまでの道のり」は決して楽なものではありませんし、長い道のりかもしれません。でも、必ずその子にあった学び方はあるものだと、私は出会った子どもたちから教えてもらっています。(了)

会員自己紹介

○ 米谷 茂則(よねや しげのり) 大学非常勤講師

一なりゆきの人生、5月で69歳

○会社に勤めながら高校は定時制夜間、大学は夜間部を卒業 昭和42年3月に中学校を卒業し、東証二部上場の化学工業会社に就職しました。横須賀追浜工場の養成工として仕事をし、夜間に横須賀市立工業高校の工業化学科に4年間通いました。1年生の半ばから大学進学を志し、明治大学史学地理学科の二部に合格しました。お茶の水で、今はない夜間部です。横須賀からは通えないので、異例でしたが、東京日本橋の本社総務部人事課に引き受けてもらい転勤しました。高校を卒業したことで、正社員になりました。人事課では初めのうちは労働法などを勉強し、そのうちに本社内の福利厚生や、工場も含めた安全衛生などを担当しました。大学4年の時には部長と課長の厚意で、三週間もの有給休暇にて教育実習をすることができ、中学と高校の社会科免許を取得することができました。人事課に4年半の後に、多品種の製品の原価計算をする別の部署に異動しました。その後は、工場の製品を知っていて原価計算もできるということにて、営業への異動が見通せました。税理士、社労士、図書館員、教員などへの転職についても考え、会社を昭和52年3月末にて退職しました。10年の会社勤務の経験が、今ある私の基盤です。感謝の念を強く持っています。

○小学校教員として学校図書館運営、「調べ学習」と読書指導の実践 退職後、千葉県の教育機関にて小学校教員免許を取得し、昭和53年4月から船橋市内の小学校に勤務し始めました。転職によって月額給料はずいぶん上がりました。初任の学校にいる間に司書教諭の資格を近畿大学の通信教育にて取得し、その後は校務分掌を学校図書館担当にしてもらい、2校目の学校では「絵本のへや」をつくりました。また、「図書資料を中心とした調べ学習」指導の実践を始めました。3年間の実践をまとめて船橋市内の研究会にて発表し、全国学校図書館研究大会にても発表しました。

上記2点の実践と小学校図書館の資料は教科名などによって配架するという実践を、岩波書店の『図書』50周年記念論文に応募して入選し、岩波新書『私の知的生産の技術』(梅棹忠夫編 1988年11月)に12編中の1編として収録されました。その後も読書指導として「絵本の絵をよむ」や「絵本の比較」、「テーマ読書」などに取り組みました。実践発表は続け、著作にもして、学校図書館関係にお名前のお出でくる大学の先生方にも送りました。40歳になった時には、勘違いから教頭試験と指導主事試験を目指しました。しかし、校長の推薦を得ながら、受験は市教委学務課長が認めませんでした。

○大学院修士、連合大学院博士課程を夜間主、5年にて修了 ある大学の先生に、大学院へ行きなさいとの助言を受け、紆余曲折の後、東京学芸大学の大学院を受験し、現職の教員卒にて合格しました。修士修了後、連合大学院博士課程にも進み、46歳から都合5年間、現職のまま平日の勤務終了後と土曜日に東学大に通いました。多くの方々に支えられ、また有効な指導助言を得ることができました。博士課程に進んだことによって学問世界の視野が広がりました。学位論文は「小学校児童の絵本読書指導論」です。連合大学院修了後には、現職のまま県教委と市教委に兼職の許可を得て、非常勤にて明治大学と放送大学の司書教諭科目の授業を担当するようになりました。大学の専任教員を目指して数多く応募しましたが叶わず、58歳にて32年間務めた千葉県小学校教員を退職し、非常勤だけでも大学教員としてやっていくことにしました。東京成徳大学の特任教授として採用していただいたのは、たいへん有り難いことでした。3年間、小学校教員免許課程の教科専門「国語」、「同指導法」、「子どもと文学」などの授業の他、「算数と理科に強い教員になれ!」と採用試験の受験指導もしました。

○現在は明治大学、放送大学のほか聖学院大学にても司書教諭科目を担当し、大東文化大学にて小免課程教科専門「国語」を担当しています。自分でも習い事をして「姿勢をよくする教室」に通って9年目になります。また、長く自学している認知科学、金融論の他に遺伝子工学、ロボット工学、ナノテクノロジーを勉強中です。

○ 市原 潤 (いちはら じゅん)

保護司・こども支援士

—「保護観察対象者」ということばについて思うこと

長野県の公立高校（長野県上田東高校校長）を退職後、県の相談機関に5年勤務し、現在は保護司として7年、地元の看護専門学校で倫理学を担当して5年になります。軽井沢に勤務していた頃の深谷先生ご夫妻のご縁で本会に入会いたしました。

保護司の活動については、「風の便り」第6号に拙稿を掲載していただきました。

今般の事態で、3月には観察所から「…保護観察対象者との面接は控え、電話で様子を確認するなどして、その状況を経過報告書に記載…」との通知が届きました。ちなみに通知の標題は「保護観察対象者の指導を担当されている保護司の皆様へ」となっていました。

いうまでもないことですが、「対象」は object の日本語訳で、object の対義語は subject です。「者」がついてはいますが、ほかに適切な語がなかったからでしょうか。当事者に向かって対象者という保護司はいないと思いますが、他に端的で適切な語がないので仲間内で相談するときには対象者の語が使われます。

英語では probationer というようですが、手元の辞書では、その語義として、見習い生(看護婦) 試補、仮入会者、牧師補、伝道試験中の神学生、などの後に、《保護観察中の》執行猶予者、とあります(現代英和辞典 1978年 研究社)。

別の辞書では、①見習い生：試補：(病院の)看護実習生：(宗教団体の)修練者、②保護観察下にある人、と説明されています(小学館プログレッシブ英和中辞典 1999年 小学館)。

保護観察は probation です。英語の語義は第一には見習い期間、実習期間であり、その転用として「保護観察」「執行猶予」があります。落第学生の「仮及第期間」とか処罰学生の「謹慎期間」の語義を示す辞書もあります。

英語圏とわが国では歴史や社会・文化の違いは大きいものがあります。失敗するとなかなかもとの道に戻れない、少年や若者と話をしていると、子どもの頃をつまづきがなかなか回復できない。家庭や学校での人間関係のつまづきや失敗が、また本人の成長発達の課題が他と大きく異なる場合など、学力や社会的能力の獲得の不如意に苦しむことが多くみられます。社会のなかに定着する道筋をともに考えながら、歩き出すことを課題として保護観察をしています。

○ 谷本 久典 (たにもと ひさのり)

学校法人雙葉学園 [雙葉小学校](#)

日本最後の清流、四万十川の流れる高知県中村で生まれ育ちました。

教師一家に生まれたということもあり、幼少の頃から教職を志し、東京学芸大学に進学しました。大学卒業後は、海外のNGOに所属し、アメリカで国際協力の研修を受けました。その後、アフリカのザンビアへ派遣され、現地の学校でボランティア教師として半年間働きました。

帰国後、東京都の公立小学校の教師として10年間働きました。

現在は、私立小学校で体育専科として1・4・6年生の授業を担当しています。

本校はカトリック学校です。建学の精神に基づきながら、授業や休み時間を通して、子ども達に力を尽くしていきたいと思っております。

日本子ども支援学会の皆様、今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

○ 渥美 卓哉 (あつみ たくや)

東京都公立学校小学校教諭・こども支援士・
日本サッカー協会公認D級コーチ

このたび、子ども支援学会に入会させていただき、とても感謝しております。学会の方々の子どもの様々なまなざしを知ることができ、学ぶことが多いと感じております。私は、小学校教諭として10年目を迎えました。日々、子どもたちの成長と向き合っています。

私が子ども支援学会に入会したのは、「こども支援士」の認証講座を受講したことがきっかけでした。教師という立場でありながら、様々な事情を持つ子ども、家庭を目の当たりにする中で、学校教育では賄いきれない部分があり、学校外でも子どもを支えていくことが不可欠となっていくと感じ、学校教育の外側を学ぼうと思いました。

また、教師になる前には、地域のサッカークラブでコーチをしたり、教育委員会に所属し、3年間小・中学校の学習指導員として、特別支援が必要な子や、不登校の子の個別指導をしたりしていました。そこで、子ども一人一人の思いや願いに寄り添って教育をしていくことが本当に大切であると感じた経験も、この学会で学びたいと思ったきっかけとなっています。

子どもの成長のためにどのような教育や支援が必要なのか日々考えております。最近では、家庭で子どもが健やかでいられるように、子どもだけでなく、親御さんたちをどう元気づけられるか、教育の知識を伝えていき不安をどう和らげられるかなど考えて学校教育にあたっています。

この子ども支援学会での学びを通して、教育者として、少しでも子どもたちの明るい未来に携わっていきたいと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。

○ 松田 憲子 (まつだ のりこ)

神田外語大学・こども支援士

神田外語大学で、教職を志す学生への道徳教育の指導法や教職論を担当しています。

もともと小学校教員で、道徳授業に関心をもち実践していましたが、授業が意図した内容項目に気づかせる指導に偏っているのではという課題意識から、児童が自分の生き方を選択する指導方法や教材開発の研究を始めたことが現在の出発点です。

その後、教育行政や教育相談機関の勤務を経て、現職に至っています。教育相談機関での多様なバックグラウンドを持つ子どもたちとの出会いは、その後の道徳授業への考え方に大きく影響し、一人一人の考えを認める大切さや、互いを尊重し合う「共生」の視点など視野が広がりました。

そのような道徳授業や教師という職について学生とともに考え、子どもたちに寄り添い、支援ができる教員の育成に、微力ながらもかかわっていきたいと考えています。

また、最近の趣味はウォーキングで、毎朝、近くの川沿いを1時間ほど歩いています。コロナ対応への自粛時期から始めたのですが、これまで見逃していた自然に気づかされています。不安も大きな日々ですが、これまでの生活や自分自身を見つめ直す機会ともなっています。

どうぞよろしく願いいたします。

○ 岩井 真澄 (いわい ますみ)

大妻女子大学児童学科

現在大妻女子大学児童学科に助教として勤めております。以前は目黒区にあります育英幼稚園で教員をしておりました。幼稚園に勤める日々の中で、子どもの面白さ、保育の奥深さに魅了され、さらに保育を学びたいと思うようになり、幼稚園退職後大学院へ進学しました。そこから幼児のためのオペレッタを研究テーマとし、子どもの表現力の涵養について考えています。幼稚園在職中に会った子ども達の生き生きと表現する姿は、私の研究の源となり、私を今でも支えてくれてます。また、大学では実習指導を担当しています。保育者になりたい学生の、希望に満ち溢れた姿を見ながら、実習指導の在り方、保育の在り方についても深く考えさせられる日々です。

現在、新型コロナウイルスの流行という世界的な危機を目の当たりにし、当たり前と思っていた日常の有り難さを痛感しています。こんな時こそ当たり前を疑い、様々な角度から物事を見る力を身につけたいと思います。子ども支援に関わる皆様の、様々なお立場からのお話を伺うことで学びを深められればと思います。どうぞよろしく願いいたします。

句会 むさしの

○ボール追ふ少女の背や柿若葉

安田 勝彦

母の日や少し甘めのジンフィーズ

ジェラシーや闇の向こうの遠花火

季節は夏となりました。自粛の中で俳句は自由自在に旅に出かけ野山を駆けまわることが出来ます。すがすがしさとちょっとシリアスな句を作ってみました。

○風光る錆びたレールのその先も

市原 潤

出水や名もなき蛇籠（じゃかご）ねじれおり

蛇籠は「蛇籠編む」として夏の季語にあげられている（山本健吉編『最新俳句歳時記(夏)』文春文庫、1977年）が、昭和57年の講談社『日本大歳時記(夏)』には記載がない（山本健吉の名も監修者にはあるけれど）。ネットで検索すると「日本じゃかご協会」のHPがあり、その年表では、1908年には、初めて亜鉛メッキ鉄線が用いられたとある。いつからか洪水に備えるために夏になると蛇籠は編まれていた。蛇籠はその構造上強い衝撃に耐えることができる。セメントで固められた護岸堤防は強いように見えるが、濁流に運ばれて衝突する大木や大石の衝撃にはもろいものである。今年の洪水で昔の蛇籠が文字通り蛇のように捩れながらも破壊された護岸堤防の裏に、その姿をのぞかせている個所がいくつもあった。



○コロナ無き俳壇^{あまた}数多ある歌壇

上島 博

初^{しよ}っ切^きりの笑^{のこ}顔遺して力士逝く

最近、新聞の俳句短歌欄を読むとき、コロナ関連のものがいくつあるかを数えています。短歌では10首中3、4首はコロナやマスク、外出自粛、志村さんや岡江さんへの哀悼などが出てきます。半分以上採用する選者もいます。震災のときも、短歌がよく詠まれたと聞きました。

俳壇に目をやると、これがとんと見当たりません。コロナなどなかったかのように、満開の桜やランドセルの1年生を詠んだ句が並びます。自粛要請で、桜など見に行けないのに……。休校措置で、子どもの通学姿も見られないのに……。

コロナを詠まなくてはいけないというわけではありませんが、現今の生活の中では、いくつかそれを取り上げたものが出てくるのが自然だと思うのです。俳句には、人々の最大の関心事を受けとめる器がないのだとさえ思えます。これは単に字数だけの問題ではありません。季語は俳諧に格調高い芸術性をもたらした反面、その縛りによって、時代、社会、政治などへの表現性を弱めてしまったのではないのでしょうか。

それならばと無季にすれば、採用されなかったり、川柳と言われたりします。川柳が悪いわけではないのですが、現状では一段下に見られている感じがします。

一方、短歌が万能かと言えば、多すぎる字数に甘えて冗長になっている歌もあります。
本欄は「句会むさしの」なので、川柳と言われようが、17音に思いを込めました。偉そうに俳論をぶった割には、“才能なし”ですみません。

○冬の夜 並んで我待つ スリッパや

三輪葉月

春日和 我は蝶なり「密」恋し

まだまだ忙しかった頃、残業して家族が寝静まった家に帰ってきた時の光景。すぐ履けるように置かれたスリッパが「お帰り」と言ってくれているようで、嬉しい気持ちになりました。
やっぱり密集が安心します！

○陽炎（かげろう）の立つ地面に座ってみる

深谷和子

中学2年生の国語の時間に出た宿題、お題は先日クラスで行った「遠足」でした。おずおずと提出した句？を、鈴木先生は優しく「いいよ」と言って下さいましたが、自分では「こんなの俳句じゃないな」と思って、70年間も胸の中にしまったままでした。「陽炎」はひらがなだったと思います。

イベント情報

第10回ワークショップ（オープン）

日時：2020.8.15（土） PM.2:00～4:00

会場：東京駅八重洲口 [ルノアール会議室](#)

発表者：渥美拓哉 「子どもサッカーの世界」

松田憲子 「道徳科導入から2年、道徳教育は変わったか」

成澤布美 「アップライブドラムとは」

司会：明石要一（敬愛短期大学学長）

※コロナが終息していれば、終了後簡単な懇親会の予定

第11回ワークショップ 多国籍化する学校（Ⅱ）

日時：2020.11.14（土） PM.2:00～4:00

会場：東京駅八重洲口 [ルノアール会議室](#)

講師：土田雄一（千葉大学教授）

司会：由田のぼら（東京成徳高校教諭）

第12回ワークショップ コラージュを貼る

日時：2021.2.13 (土) PM.2:00~4:00
会場：東京駅八重洲口 [ルノアール会議室](#)
講師：近藤和子
参加費：(用紙代として) 500円

なおこの回は、事前にご準備、ご持参いただく材料があります。
ピット糊、ハサミ、雑誌・新聞・広告・カタログ等 (ページを切り取っていいもの)。
台紙 (38×54センチ) はご用意しますので、ご出席の方は2月5日までにお知らせ下さい。
申し込み先： ワークショップ担当/和田奈々子迄 wada75@u-gakugei.ac.jp

みなさま、ふるってご参加ください。会員でない方のご同伴も歓迎いたします。

編集後記 (ニューズレター委員会：深谷和子)

みなさま、〈自己紹介欄〉や〈句会むさしの〉、またその他、近況などのお原稿をお待ちしております。なお、一斉メールはワンウェイで設定してありますので、お原稿は下記迄お送りください。3で割れる月の前月の20日が締め切りです。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子 (長) ・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2020年6月号目次〉

[今月の花・今月の詩](#)

細江久美子・ゆあさとしお

[実践報告 I](#)

川崎佳子

[実践報告 II](#)

清文枝

[会員談話室](#)

[会員自己紹介](#)

米谷正則 市原潤 谷本久則 渥美卓哉

松田憲子 岩井真澄

[句会 むさしの](#)

安田勝彦 市原潤 上島博 三輪葉月 深谷和子

[イベント情報](#)

(第10回から第12回まで)

編集後記 (深谷和子)